

中級における漢字指導

－1990年度冬学期の日本語 4 の場合－

高 嶋 真理子

1. はじめに

外国語として日本語を学ぶ学習者は、漢字一つ一つについて、意味と形と読みを結びつけ、さらに言葉としての使い方を覚えなければならない。初級段階までは、教師が読み方、書き順、意味、使い方などを丁寧に教えるが、中級になると、個々の漢字について初級のように丁寧には指導しない。教師は、新しい漢字の熟語例を学習者の既習漢字との組み合わせでできるだけ提示し、漢字の造語力に気付かせる。一つの漢字が色々な読み方や意味を持つ場合があり、熟語の理解のために読み方や意味がわかっていると便利であることを経験させる。このようなことを通して、学習者が自分なりの漢字を覚える手段を身につけることが中級の始めで期待される。そして学習者が漢字を体系的に習得できるようになれば、次には、辞書を使用して自分で学習する段階に入れる。では、中級始めでは具体的にどのような指導ができるだろうか。

ICUの日本語教育には、1週間に10時限学ぶコースがあり、これには6段階ある。そのうち日本語1、2、3が初級に、4、5、6が中級にあたる。すなわち日本語3から4にかけてが、ちょうど初級から中級に入る段階になる。ICUでは1990年の夏期日本語教育から新しく作られたICU初級教科書を使用しており、その教科書では日本語3までで400字の漢字を学習する。日本語4では100から300字の範囲内で新出漢字がでてくる。

筆者は1990年の秋学期に日本語3、冬学期に日本語4の漢字指導をした。この2学期とも構成する学生がほとんど変わらなかったのも、筆者は2コースにわたって学生の漢字学習を観察した。日本語3は学年始めの秋に開講されたのでいろいろな学生がいて漢字の学習レベルが多様であった。それで既習漢字の復習をしながら新出漢字を指導した。日本語4では1課に出てくる新出漢字がそれまでの3～4倍になり、習得漢字とほとんど同数を1学期間に学習しなければならなかった。本稿では、このような学習状況下で、筆者が日本語4

すなわち中級始めで行なった漢字の指導法を述べ、さらに、その指導結果をクイズおよびテストの分析から考察する。

2. 日本語3までの漢字指導の状況

始めに、1990年の秋学期の日本語3がどのような内容だったかを簡単に紹介する。筆者が日本語3で担当した学生は21名で、夏期日本語教育を受けた者が7～8名、漢字圏の出身者および漢字既得者が4名、漢字未学習者1名、残りは漢字学習歴が150～200字程度と推測される者であった。コースの始めに、初級教科書の日本語1～3の学習漢字から無作為に選んだ漢字の読みのテストを課したところ、多くの学生が日本語1や2で学習する漢字すら忘れていたり、あるいは学習していないことが判明した。カリキュラムでは課ごとに漢字指導に1時限が割り当てられていたので、各課の新出漢字10字に加えて、日本語1および2の漢字を復習する方針をとった。学習の目的は、忘れた漢字を再現し、記憶を固定化させることにあった。一つでも多くの漢字を覚えられるように、また漢字の学習が楽しくなるように、毎回の授業で色々な方法を試みた。漢字の語源や構成部分の組み合わせに注目して、漢字の意味と形を結びつけて覚えるきっかけを与えるなど、一つの漢字に課する時間を十分にとった。そして学期末までに初級の漢字を読み書きできるようになることを目標とした。

3. 日本語4の漢字学習の状況

ところが、日本語4になると、学習状況はそれまでと全く異なった。1990年冬学期の日本語4では、教科書として「Japanese By The Total Method :Part Four」の一部および「のばら」という読み物を使用した⁽¹⁾。この教科書は新出漢字数が初級の教科書と比べて段違いに多い。また、この日本語4は、新しく作られた初級教科書が提出している漢字の積み上げの上に位置するものとしてとらえる必要があった。そこで、コースの始まる前に、新しい初級教科書の日本語1～3までの新出漢字と日本語4の本文に出てくる漢字を照合する作業を行なった。その結果は、表1のように、新しい初級教科書を使用した場合の方が、これまでの教科書⁽²⁾を使用するより、やや新出漢字数が増えてしまうことになった。

表1：日本語4の新出漢字数－初級教科書別の比較

表中の数値は「新出漢字数(読み替え漢字数)」

課	これまでの教科書を使用した場合の新出漢字数	新しい初級教科書を使用した場合の新出漢字数
第1課	20 (7)	20 (3)
第2課	32 (15)	35 (17)
第3課	39 (19)	52 (9)
第4課(1)	25 (10)	29 (9)
第4課(2)	15 (8)	22 (6)
第7課	38 (18)	51 (5)
のばら(1)	35 (不明)	43 (8)
のばら(2)	26 (不明)	28 (2)
計	230 (77)	280 (59)
1課の平均	28.8 (9.6)	35.0 (7.4)

学習者にとって、日本語3から日本語4にかけての漢字学習量の急激な増加は、かなりの学習負担をもたらすであろうし、また、学習方法を変えるすなわち漢字に対しての見方を変える必要が出てくる。漢字学習の位置付けが初級までと異なってくる。漢字そのものが学習対象だったのが、日本語で読み書きするための手段になっていく。学習者は日本語の文章を読み進むために漢字をどんどん吸収していかなければならない。日本語4は、この学習スタイルの移行の始まり、つまり初級から中級へ移っていく橋渡しの位置にある。漢字を自分の頭の中でどうとらえ、どのように習得していくかが個々の学習者に備わってくる時期である。この段階で自分の習得方法を作り字数を積み上げていくことが学習者の漢字知識を確かなものにしていく。このようにとらえると、日本語4における漢字指導は大切と言えよう。

しかし、実情として日本語3までは漢字数が少なかったにもかかわらず習得が容易でなかったのを考えると、日本語4に進んですぐに個人学習にするのは無理である。新出漢字を辞書で自分で調べさせるなどとしたら、漢字学習ばかりに時間をとられる状況を作りかねない。日本語5に進んだ時に、学習者の自習にまかせるレベルになるように持っていく

のが望ましい。すなわち、日本語4は漢字の自習ができるようにさせる準備の段階と考えればいい。教師は学習者が漢字を独習できるようになるための手助けを、つまり独習できるようになるきっかけを日本語4で与えてやらねばならない。

4. 日本語4における新しい漢字の指導法の試み

以上のような日本語4の漢字学習の状況で、どのような指導が適切であろうか。日本語4の受講者は19名で、日本語3から2～3名の入れ替えがあったが、全体的としては変化はなかった。前述した日本語3の学習から日本語4に進んできた学習者に筆者が試みた新しい指導法を紹介する。

a. 漢字の副教材の作成

日本語4で使用する教科書では、新出漢字について読み方（音訓）とネルソンの漢字辞書の番号が提示されている。この番号を使って辞書で書き順や熟語例を自分で調べることが要求されているようだ。しかし、学生がすでに購入していた漢字辞書が別の辞書なので、この漢字番号はあまり役に立たない。さらに、学生が新出漢字の意味や書き方などを漢字辞書を使って一つずつ調べるとしたら、非常に時間がかかる。和英辞書や電子辞書などで簡単に意味を調べて終わらせる学習者もいるが、それはあまり効果的な学習ではない。物理的に考えて、学生に個々の漢字について調べることを課すのは、他の学習事項との関連から適切ではないと筆者は判断した。

では、漢字についてどのような情報を学習者に与えるのがよいか。教科書からわかるのは、新出漢字の本文中の熟語とその読み方、さらに一般的な音訓読みだけである。個々の漢字の意味と熟語の意味は書かれていない。筆者は、かねて学生から要望されていた「新出漢字の使い方を一緒に教えてほしい」という点を考慮に入れることにした。すなわち、漢字（意味と読み）、その熟語（意味と読み）と簡単な例文（使い方）などを盛り込んだ新しい漢字の副教材を作成することとした。

新しく作成した副教材の内容は、① 漢字の字体(印刷書体と手書き書体)、② 漢字の意味(英語で)、③ 常用漢字の番号(「よくわかる常用漢字」(1987)の常用漢字番号を採用)、④ 音訓読み、⑤ 音訓読みそれぞれに関する熟語数例とその意味(英語で)、⑥ 熟語の例文(教科書中の熟語は本文を例文とし、他は既習文法、語彙、漢字を使った例文を作成した)、⑦ その他の情報である。熟語の読みは各ページには載せず、最後にまとめて一覧表にした。これは、学習者に読み方の練習をさせるためである。英語で意味を説明したのは、漢字の意味を正確に時間をかけずに取り入れるためである。書き順は提示しない。辞書を引く練習を学生にさせるためである。学生は、学期の始めに「よくわかる常用漢字」という

漢字辞書を購入しているので、その辞書を利用して自分で調べるように指示している。教科書には参考のために一つの漢字の持つすべての音訓があげられているが、学習者が混乱するので、提示する読みと熟語例を筆者が決めた。図1はその一部である⁽³⁾。

図1：日本語4のための新しい漢字副教材

●積 積	1503 (accumulate, product, size, area, pile up, heap, load)
セキ	面積 (area) 正方形の面積は「たて×よこ」です。
セツ	<u>積極的</u> (positive, active, aggressive)
	話し合いでは積極的に意見を言う方がいい。
つ(む)	<u>積む</u> (pile up, heap) 自転車に積んだ牛乳びんの音。
つ(もる)	<u>積もる</u> (be piled up) 雪が降り始めてもう20cmも積もった。
▲牛 牛	337 (cow, bull, ox, cattle)
ギユウ	<u>牛乳</u> (milk) 牛乳からバターが作られます。
うし	生 (cow) 牛と馬とどちらが大きいですか。

●：新しい漢字 ▲：新しい読み方がある漢字
 ____：教科書のことば ____：教科書にない大切なことば

このような内容の副教材になったのは、学生が購入した辞書に漢字の意味が載っておらず、しかも、辞書中の熟語例が日本語4に必ずしも適しているとは限らないからである。できれば熟語は既習の漢字を応用した熟語でしかも日常で遭遇する機会があるものがある。また、多くの辞書がそうであるが、熟語の例文すなわち使い方がでていない。日本語4は、ていねいな初級の漢字指導から卒業したばかりで、これから自分で漢字を調べる学習を身につける段階である。だからこそ、熟語の使い方が出ている辞書は大切である。

こうして、一般の漢字辞書を使いこなすにはまだ日本語の実力が中途である学習者に、「日本語4のための辞書」というべき形で漢字の情報を提示するのが今回作成した漢字の副教材である。

b. 授業における漢字指導の実際

授業は1課につき1時間が漢字にあてられ、漢字の副教材を中心に進められた。学習すべき漢字数が多い場合は、時間内にできる程度の漢字数を拾いながら提示した。字形が複雑なものや書き順がわかりにくいものは書き順を示し、一つの漢字が構成部分から成り立つものは、覚えやすいように既習の漢字と比較したり構成部分に気づかせたりした。漢字を

覚えるためには学生が自分なりのきっかけを考えればいいのだが、そのきっかけになるような何らかの情報を教師が提示してやれると効率がいい。授業中に漢字を書く作業は特にさせなかった。漢字の数が多く、書くために時間を使う余裕がないため、書く作業はすべて授業外の自習とした。

授業の進行は、基本的に新出漢字の書き順や形の説明を黒板を使って行ない、次に副教材を見ながら、読み方や熟語の例文を読んでいく。例文は易しいものを選んであるので、時間があるときは学生に読ませたり教師が読んだりする。学生は副教材を見ながら、既習の知識を利用して、似たような意味の熟語や似たような形の漢字を引き出してきて、教師に質問することもある。それは、既習の知識と新しい知識を結びつける作業を学生が自ら行なっているといえる。また、教師の方から、既習の漢字と組み合わせた熟語を提示したり、似ている形の漢字を思い出すように質問したりする。

c. クイズの内容

各課ごとに授業の2～3日後にクイズ（小テスト）を行なった。クイズが学習した漢字を習得する助けとなると考えたからである。内容は、ディクテーションによる書き取りと読み方を書く問題と、単語の使い方などである。

d. 期末テストの内容

期末に、学習した全漢字を範囲にしたテストを実施した。テスト問題は、クイズで行なっていたディクテーション形式の質問と、読み方と書き方を書かせるという簡単なものにした。テストの範囲が学習したもの全体なので学習漢字数が多かったためと、単語の意味に関する問題を文法テストに課したので漢字テストは純粹に漢字をどれだけ書いて読めるようになったかをみることにしたためである。

5. 学習成果の分析

a. クイズおよびテストの成績

表2は、各課のクイズと期末テストの得点の平均点を百分率で表わしたもの、および得点の範囲である。

表2：日本語4のクイズと期末テストの平均

課 名	人 数	平 均	得点範囲（最低－最高）
第1課	15人	74.8%	27－46／50点
第2課	13	61.2	13－41
第3課	19	78.2	28－49
第4課(1)	18	77.0	23－49
第4課(2)	19	81.6	28.5－48
第7課	19	68.0	25－47
のぼら(1)	19	73.4	12－46
期 末	19	59.0%	21－87／100点

結果からみてわかるように、クイズは第2課が他に比べて低い。これは、冬休み明けで学生が勉強してこなかったことに影響されている。第7課は他のクイズに比べて難しいものだったので平均が低くなったと思われる。「のぼら(1)」は実施時期が期末に近かったために学生の勉強不足がひびいたといえる。全クイズを平均してみると73.5%となる。クイズは平均80%程度になるように作成したかったが、学生側の学習不足を含めると、この平均点は悪くはないと思われる。期末テストは、テスト自体は難しいものではなかったにもかかわらず、平均点が低かった。

b. 期末テストの読み・書きの正誤の分析

期末テストの内訳は、読み25問、書き25問であった。計50問について正答率を出すと表3のようになった。

(1) 読みについて

読みで50%以上の正答率を得たのは、25問中15問(60%)である。その60%の内容をみると、第7課・第4課・「のぼら(1)」からの質問が多い。単純に考えて、期末テストに近い時期に学習したものが正答率が高い。つまり、クイズのために学習した行為の保持率は学習保持期間の長さとは反比例している。また、「のぼら(2)」からの質問は、最後に学習したもののだが正答率が低い。これは、「のぼら(2)」に関してのクイズを課さなかったことが影響しているのかもしれない。読みの場合は、漢語自体の難しさより学習してからどのくらい時間が過ぎているかが、読みの記憶に影響している。

また、全体にみて、2字以上の漢字熟語より、単漢字による形容詞や動詞などの訓読みし

表3：期末テストの読みと書きの分析－正答率

(*：読みクイズに出題 #：書きクイズに出題)

順位	正答率	漢字→読み	課	クイズ	正答率	読み→漢字	課	クイズ
1	95%	狭い→	4 (2)		63%	→無理	4 (1)	#
2	80	酔っ払い→	7	#	58	→恋しい	の(2)	
3	"	退屈→	の(1)	*	53	→心配	4 (2)	
4	74	交通事情→	7		"	→駐車場	3	
5	"	慣れる→	1	#	47	→戦争	の(1)	#
6	68	景色→	の(1)	*	"	→興味	1	#
7	"	原因→	7		"	→文型	1	
8	"	混雑→	4 (2)	#	"	→隣	3	#
9	"	新鮮→	3	#	37	→内容	1	#
10	"	派遣→	の(1)	*	"	→社宅	3	
11	63	吹き抜ける	7		"	→様子	4 (2)	
12	58	診察→	4 (1)	*	32	→大丈夫	4 (2)	
13	"	両日→	4 (1)		"	→生徒	1	#
14	"	優しい→	の(2)		26	→暇	の(2)	
15	53	決算期→	4 (1)	*	"	→正直	の(1)	#
16	"	遅れる→	3	#	"	→練習	1	
17	37	提出→	2	#	"	→解決	7	*
18	"	接触→	4 (2)	*	"	→消化	4 (1)	#
19	"	指揮→	の(2)		21	→腰	の(2)	
20	32	停留所→	3		"	→激増	7	
21	"	努力→	1	#	"	→講義	3	#
22	26	衝突→	4 (2)	*	16	→救急車	4 (2)	*
23	21	技術→	2	*	"	→通勤	3	*
24	16	静粛→	の(2)		"	→群がる	の(2)	
25	11	童話→	の(2)		"	→整理	2	#

ている語の方が正答率が高い。（「狭い」「酔っ払い」「慣れる」「吹き抜ける」「優しい」「遅れる」。）この結果は、漢字の覚え方を考える鍵にならないだろうか。なぜ、訓読みの単漢字の方が覚えやすいのか。その語自体が、すでに語彙として知っている形容詞や動詞だからかもしれない。熟語はなぜ覚えにくいのか。日常では使われにくいからだろうか。

(2) 書きについて

読みに比べて格段に正答率が低い。50%以上正答しているのは、25問中4問(16%)にすぎない。正答率の最高は63%である。それだけ、いかに書くことが覚えにくいかがわかる。

読みのように正答率の高さと学習時期に関連があるかどうかをみると、書きに関しては関連はほとんど無いようである。学習した時期より、個々の漢字および漢語の覚えやすさの方が正答率に影響している。正答率が高い方の漢語には、「無理」「恋しい」「心配」「駐車場」「戦争」「興味」「文型」などがみられるが、これらは日常でよく使われるものだったり、最近の話題に関連した言葉だったりする。つまり、学生の生活に関連した生きた言葉が漢字化されたものである。それに比べて、正答率が低いものには、「救急」「通勤」「群がる」「整理」などがあるが、これらは学生の日常ではあまり使わない言葉である。また、「恋しい」などは「のぼら(2)」からの質問でクイズも課していないにもかかわらず、比較的よく覚えている。この字自体は日常生活であまり使われない。なぜよく覚えているのか。語の意味が学生にとって覚えやすいのかもしれない。また、字形の成り立ちが覚えやすいのかもしれない。

読み書きともに、クイズで提出したものと期末テストの正答率に関連するかどうか調べるために、表3のように、期末で出したものをクイズで「読み」「書き」として出したかどうかを調べた。結果を見ると、各25問中、読みは15問が、書きは13問がクイズで出された問題であった。読み書きともに、クイズで提示したかどうかは期末の正答率に明白な関連はみられない。この点から考察すると、クイズに出たか出ないかが記憶の保持に影響するとはいえないことがわかる。

6. まとめ

期末は内容的にむずかしくはない。問題はテストの範囲が学習内容全体だった点である。広い範囲のものをどのぐらい保持できるか。言い換えれば、一度覚えたものをどのぐらい覚えていられるものかということである。結果は数値が示す通りであった。クイズを課していても、やはり、学習してからある程度の時間が経つと忘れる率が相当高い。学習内容を学期中でさえ保持するのは難しいようだ。読みは比較的覚えている率が高いが、時間が経つとともに忘れるようだ。それに対して、書きの保持には、学習してからの時間とは別の要因、すなわち、日常でよく使う漢字であることや漢字を学習したときに覚えるきっかけがあったことなどが関与しているようである。

以上のように、日本語4の新しい指導法による効果は従来の指導との直接比較ができないので明らかに言えないが、しかし、クイズとテストの結果分析からは、学習者の漢字習得には読みと書きで異なった傾向があり、また従来のクイズが必ずしも非常に効果があるとも言えないことがわかった。

<参考事項>

(1) 1990年冬学期日本語4の教材は、下記の通りである。

Brannen, N.S. (1980). Japanese By The Total Method : Part Four.

Japan Missionary Language Institute. から

第1課 日本語の勉強

第2課 山田さんの一日

第3課 散歩

第4課 (1)病気

第4課 (2)けが

第7課 交通

「のぼら(1)」新潮文庫 小川未明童話集より

「のぼら(2)」 ”

(2) それまで使用してきた教科書とは、ここでは下記のものを意味する。

Brannen, N.S. (1980). Japanese By The Total Method One,Two,Three.
Japan Missonary Language Institute.

(3) 作成の際に参考にした参考書は以下の通りである。

今田滋子・稲垣滋子・広瀬正宜・ノア S ブラネン (1987) 『よくわかる常用漢字－
改訂英語版』 凡人社

Spahn, M., & Hadamitzky, W. (1989). Japanese Character Dictionary (漢
英熟語リバース字典) . Nichigai Associates.

Heisig, J.W. (1986). Remembering The Kanji I. Japan Publications
Trading CO., LTD..

貝塚茂樹・藤野岩友・小野忍 (1959) 『角川 漢和中字典』 角川書店

下村昇 (1987) 『下村式 小学漢字学習辞典』 偕成社